

## 再び、保育の中の小さなこと、大切なこと (3)

守 永 英 子

年長組になって、しばらくすると、大学のU先生に依頼されていた実験が始まった。一人ずつ別室に行き、U先生に示された絵を見て、お話を作る。子どもの遊んでいる様子を見ながら、行き易い状態の子どもに声をかけるのだが、女兒は、積極的に行くこうとする子どもが多いのに比べ、男児の中には、嫌がる子どももいる。

六月初めのその日は、K夫、N夫、T夫の三人のグループが、保育室の中で遊んでいた。絵をかいていて、誘いにくい状況であっ

たが、U先生の誘いに、三人の中では一番物おじしないK夫が応じた。K夫がU先生と別室に去った後、T夫が、私にそっと近づいて、小さな声で言った。「次は、ぼくにして！ N君より早くね」

私の心に、驚きと、とまどいと、喜びとが次々に広がった。実は、私は、T夫が、このような課題場面を忌避するのではないか、と思っていたのである。小学校に進み、課題に満ちた生活が始まったら、T夫はどうするだろうか。その思いが、昨年度の終り頃から、

私を不安に陥れていた。そのために、今のうちにしておかなければならないことは何か、私にやれることは何か、それは、私が頭を悩ませていた課題であった。

私は驚きと感動を抑えて、T夫に言った。

「それじゃ、U先生に、自分でそうお話ししたら……？」そう言いながら、T夫は、本当に自分で言えるだろうか、言えなかったら、私が助けて、その意を伝えた方がよいだろうか、など、いろいろと思いつくがらしていた。

しばらくして、K夫がU先生と戻ってくると、T夫は、自分からU先生に近づき、「今度は、ぼくにしてください」と、小さな声で、しかし、はっきりと言ったのである。

T夫は、三歳から通園している子どもであるが、おとなしく、声も小さい。年中組の終り頃は、年少組の時から一緒だった男児のグループの中に入って、活発にサッカーなども

するようになったが、内気な子どもで、私の不安には、充分、理由があった。

昨年度のことである。四歳児クラスも、二月下旬に入ると、年度末の忙しさに追われていた。子どもたちがそれぞれにやりかけた製作を、仕上げさせたいという思いも、その一つであるが、毎年、卒業する年長児へ、年中組から、手作りのプレゼントを贈ることになっている。又、ひなまつりを前にして、自分のおひなさまを作ろうという活動も始まる。

T夫は、いつもの仲間と、遊戯室で、サーカスごっこをしていたが、グループが保育室に戻ってきて、年長組へのプレゼント作りを始める時、一緒にやり始めた。しかし、他の子どもたちが仕上げて、T夫は、「失敗した」と、かいた絵を折りたたんで、その日はやめてしまった。

二月の末、M夫たちが、おひなさまの続き

をやり始めたので、作りたい人は、ひなまつりに間に合うように、声をかけた。五、六人が参加し、T夫も自分から加わった。しかしT夫は、おひなさまの顔を、小さく、いくつも書き直しては、自分で気に入らないらしく、とうとう紙は、かき損じで一杯になってしまった。思いがけない成り行きに、私は、とまどいながら、「気に入ったのできるまで、かいてもいいのよ」とT夫を励ました。代りの紙をあげたが、降園の時刻になって、その日は、それで終った。

プレゼント作りと、おひなさま作りと、引き続き続いている、T夫のつまずきである。今まで気にかかっていたT夫の消極的な面が、一挙に現れて、私に課題をつきつけたようであった。

私は、T夫の気持をいろいろと思ひめぐらして、T夫が、おひなさまを作りたくないな

らば、その気持に添って、通させてあげるところがよいのではないか、と思った。が、T夫の気持が、もうひとつ、はっきりと捉え難い。

私は、T夫の母親に、T夫の気持を知る手がかりを求めた。母親は、「家では、『今日はできなかった』と気にして、やりたいと思っているようです」と、疑いもせず言う。本人に、作りたい気持があるならば、作り上げた喜びを味わわせてあげたい、と決心して誘ってみると、当然のように、あっさり「作る」と言う。しかし、「作る」というわりには、途中で庭に出された兎の方に行ってしまう、「やりかけで行っちゃった」と、私の方を気にする。紙をあげても、前回と同じに、いくつも、小さなゆがんだ円をかいては、ぐしゃぐしゃと消す。随分と手を貸し、声をかけながら、やっと出来上らせると、T

夫は、ほっとした様子であった。家では、「作ったよ」と、母親にうれしそうに告げたということだったが、私は釈然としなかった。

T夫は、やはり、おひなさま作りを、したくはなかったのではないか。T夫は、母親や教師の期待に応えたい、あるいは、応えねばならない、と思っただけだったのではないか。T夫が、おひなさま作りをやりたくないならば、自分の、「やりたくない気持」を、自分ではっきり捉えさせる方が、よいのではないか。T夫は、自分の気持をはっきり捉え、自分の気持に従った行動をとれることが、今は大切なのではないか。——さまざまな思いが、私の中に残った。

卒業式も近づいて、年長組へのプレゼントも次々に出来上り、五人を残すだけとなった。そのうち、HとMは、「今日はしない。

あとにする」と、庭に出て行った。YとAとT夫が、やり始めたが、T夫は、相変わらず、ぐずぐずと、黒一色で紙をこすり、紙に穴があいてしまう。次の紙も、少しかいては、まるめて捨てる。三枚目は、木や人をかきかけ、私がほっとしたのも束の間、くしゃくしゃにまるめてしまう。

年長組へのプレゼントは、卒業式の日、自分の作品を、年長組の子どもに手渡すので、全員が作ることになっている。

私は、じりじりする気持を抑えながら、「紙は沢山あるから、かき直しても大丈夫よ」と慰めた。T夫は、ぐずぐずしながら、小さな声で、「紙は沢山あるから、大丈夫だよね」とつぶやく。今まで、捉えにくいと思えたT夫であったが、T夫のぐずぐずとした動きに、気がのらないことが、ありありと見え、それでも、「あとでする」と言えないで、そ

の場に縛られているT夫の気持が、痛いほど感じられた。私は、胸がつまって、思わず、T夫を抱き寄せて、「かきたくないのね？」と優しく尋ねた。T夫は、黙ってうなずき、こらえていた涙があふれ出た。

作らなければ、プレゼントを持っていくとき、T夫は、どうするだろうか。他の子どもに、もう一つ作ってもらって、T夫に持たせようか、その時、T夫は、どんな気持になるだろうか。T夫が困らないような、プレゼントの渡し方が、工夫できるだろうか。——私の心は、いろいろな状況を思いめぐらし、困惑しながらも、その心配は、私が背負ってあげなければならぬ、と心に決めた。「かきたくなければ、かかなくてもいいわ。大丈夫なように、私が何とか考えるわ」今までのT夫の苦しさを考えると、私は、そう言わずには、いられなかった。

翌日、「あとにする」と言っていて、昨日しなかったHとMに、「今日しなれば、する日がなくなってしまうのよ」と告げた。二人がやり始めた頃、T夫がそばにきた。T夫の気持をはかり、迷いながら、そっと声をかけてみた。「どうする？　かく？」

T夫は、はっきり「うん」と言っていて、さつさと、草むらの中に、二匹の虫をかき、あっさりと、手ぎわよく仕上げた。昨日まで、あれほど深刻に、私を悩ませたのが、うそのようであった。

次の日の、帰り際のT夫の支度は、とても早かった。今までは、コートのボタンをはめないまま、「ボタンをはめて、きちんと支度をしてね」という、クラス全体への注意にも、あまり反応しなかったT夫が、素早くコートを着て、自分から「はめて」と、そばにきたのである。心なしか、表情にも、親しみ

が感じられた。「Tちゃん、早いわ」と、ほめながら、ファスナーをはめてあげ、これを、「T夫の変化」と捉えていいだろうか？と心の中で繰り返した。

T夫は、自分の気持が理解されたと思ったとき、泣くことができ、気持が解放されたのであろうか。年長組になってからの、U先生への、積極的な働きかけは、やはりT夫の変化の証だったのではないかと思う。私の悩みも、やっとトンネルを抜け出たようである。

(お茶の水女子大附属幼稚園)

